持続可能な開発パラダイムにおける教育と産業人材育成

2013-2015年のアジェンダ形成過程の言説分析から

山田肖子
名古屋大学

JASID東海　2016年8月5日

ポスト2015のアジェンダ形成プロセスの言説分析

- 一定の概念が主流化していくプロセスを解明する
  - 様々なグループの人々が “Post-EFA”, “Post-2015 and “SDG”という共通の用語を用いて議論を展開する

  ←概念は、最初から意味を持っているのではなく、*社会的に構築される(socially constructed)*

  ←概念が構築される過程には、そこに参加する*アクター*の*力関係*が反映される。

  ←言説は、それに基づく実践を可能とする*構造*を作る。同時に、構造が言説を条件づける

  ←元来は、言語学の研究アプローチだが、政治や社会調査に広く応用されている

  フーコー「狂気の歴史」(1964)
- ポスト2015議論は、異なる見解が持ち寄られ、「グローバルな開発コミュニティ」の「共通見解」を形成する様子をとらえる好機
  - 誰が議論の過程に参加したのか？
  - アクターは、どのような見解を議論に持ち込んだのか？
  - 議論の結果、何が「共通見解」となったのか？

データと分析方法

2000年にMDGsが合意されるときよりも、圧倒的に多くの意見が、様々な人や団体によって、文字媒体で発信されており、これらの傾向を分析するのに、従来の定性的な言説分析の手法では限界がある。

←大量情報発信と不特定多数の人々が参加する議論を把握するための手法上のブレークスルーが必要

＜データ＞

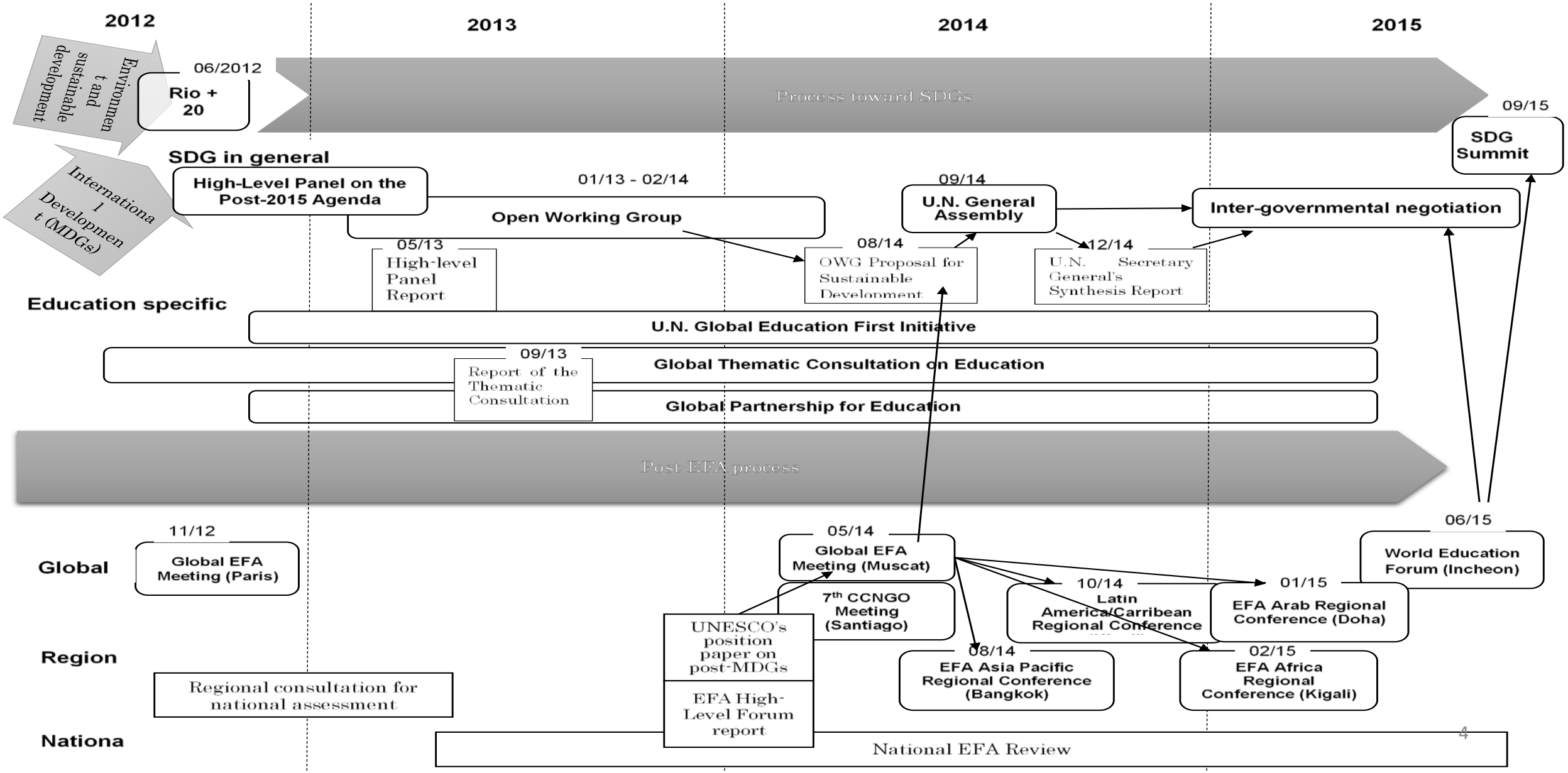
2012年末から2015年5月に韓国・仁川市で開催された世界教育フォーラム(WEF)までの期間に発行・発表され、インターネット上に公表された報告書、意見書、会議録等

- 1,720 文書(2011年－2件、2012年－60件、2013年－127件、2014年－953件、2015年—578件）、メモリ量—20,000 KB

→ テキストマイニング

大量のテキストデータを、それを構成する単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向、時系列などを解析することで、一定の傾向性を見出す手法。

The process has been too complicated: But what did it really mean?



SDG4 adopted at the U.N. SDG summit (Sept. 2015)

Goal Ensure inclusive and equitable quality education and promote lifelong learning opportunities for all

Target 1: By 2030, ensure that all girls and boys complete free, equitable and quality primary and secondary education leading to relevant and effective learning outcomes

Target 2: By 2030, ensure that all girls and boys have access to quality early childhood development, care and pre-primary education so that they are ready for primary education

Target 3: By 2030, ensure equal access for all women and men to affordable and quality technical, vocational and tertiary education, including university

Target 4: By 2030, substantially increase the number of youth and adults who have relevant skills, including technical and vocational skills, for employment, decent jobs and entrepreneurship

Target 5: By 2030, eliminate gender disparities in education and ensure equal access to all levels of education and vocational training for the vulnerable, including persons with disabilities, indigenous peoples and children in vulnerable situations

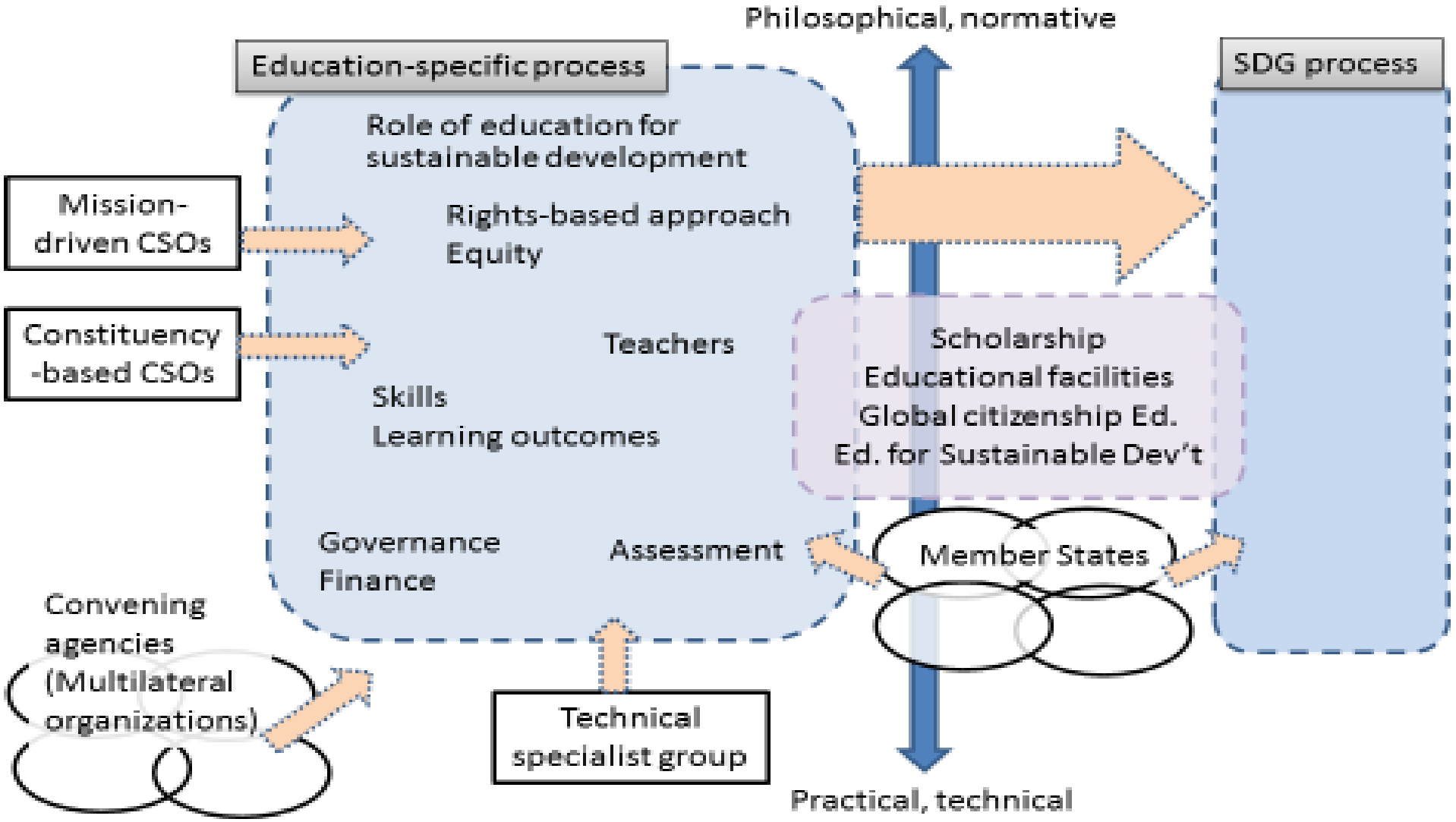
Target 6: By 2030, ensure that all youth and a substantial proportion of adults, both men and women, achieve literacy and numeracy

Target 7: By 2030, ensure that all learners acquire the knowledge and skills needed to promote sustainable development, including, among others, through education for sustainable development and sustainable lifestyles, human rights, gender equality, promotion of a culture of peace and non-violence, global citizenship and appreciation of cultural diversity and of culture's contribution to sustainable development

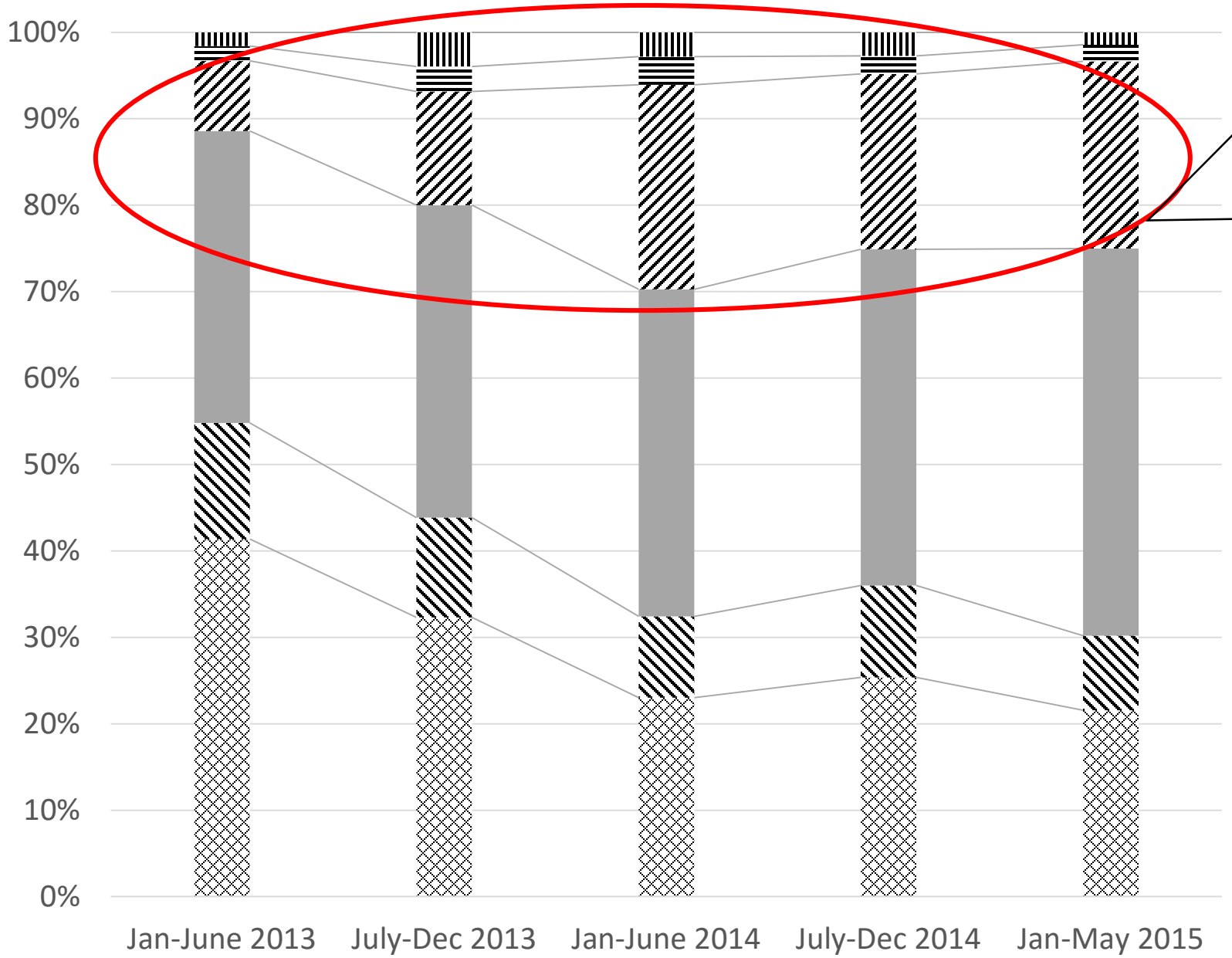
クラスター分析で得られた6つの概念群

- 出現頻度の高い250語のうち、共起する可能性や相互の距離が近い単語をグループ化した結果、6つのクラスターが得られた
- アジェンダ形成プロセスと実施の構造に関するクラスター
  - 「教育の根本原理」ーHuman Rights、Socio-economic Developmentなどの単語で構成
  - 「国内課題」ーNational development, Country process (Monitoring, Data collection, Consultation), equity of serviceなど、国内の実施プロセスでの課題
  - 「グローバル課題」ーGlobal consultation, global agenda, data/indicatorsなど、グローバルな実施プロセスでの課題
- 教育の内容に関するクラスター
  - 「学習条件」ーTeacher, student, girls education, health
  - 「教育の質」ーLearning outcomes, Assessment, Curriculum
  - 「スキル」は、Skill, Literacy, Numeracy

Educational ideas brought into the post-2015 discourse by various actors



6つのクラスターに属する単語の使用頻度の変化（%）



ポスト2015議論の大部分は、構造や手続きに関するもので、教育の内容に関するものは前面に出にくい

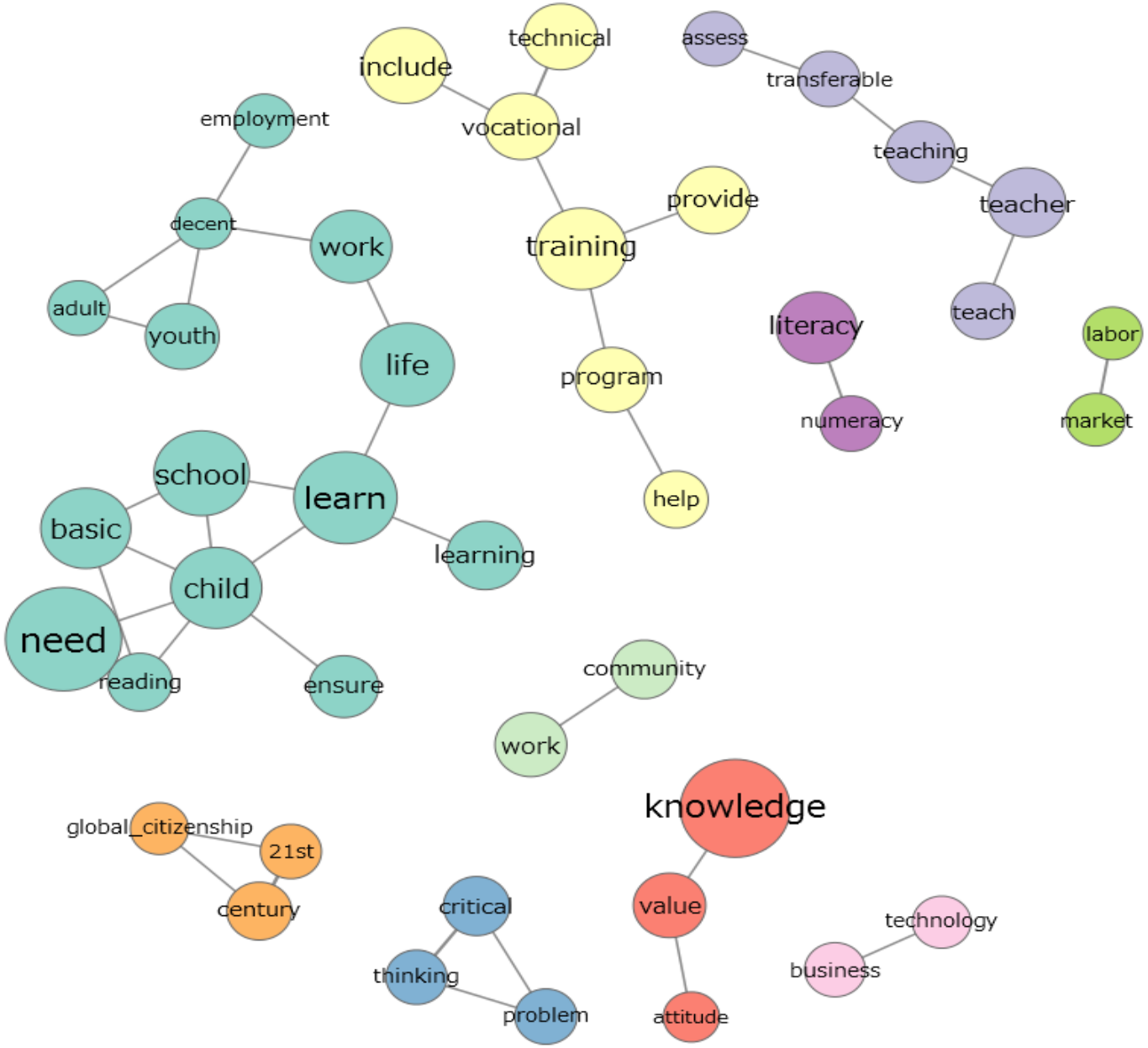
↓

教育の内容に関するクラスターのみを取り上げて、さらに詳しい分析を行った

- Quality of education
- Skills
- Learning conditions
- Global issues
- National issues
- Fundamental principles

「スキル」とともに用いられる頻度が高かった単語

- スキル・クラスターを構成する単語（Skill, Literacy, Numeracy）と共起する単語の距離と頻度を示す
- 円の大きさ：出現頻度
- 単語間の線の距離：単語が相互に依存する度合い



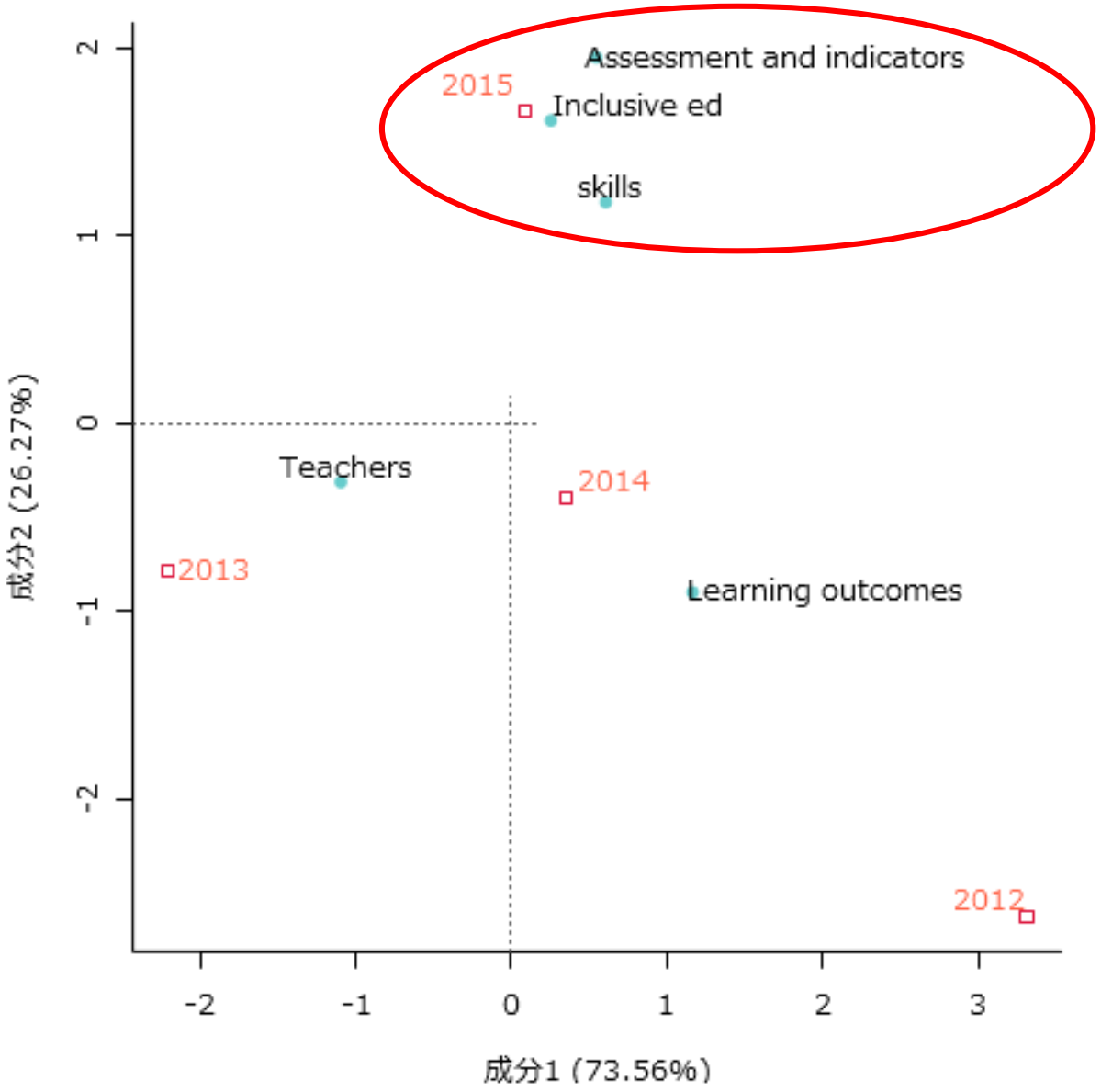
共起性から見える教育の内容に関する主流概念の特性

- 「スキル」概念は、学習者の認知的、非認知的、職業的技能を広く包摂する概念として発展
  - 認知的(cognitive)スキル：Literacy, Numeracy → SDG4 Target 6
  - 雇用可能技術：technical and vocational education, labor market, work, employment → SDG4 Target 4
  - 非認知的スキル：21st century skill, knowledge-value-attitude, critical thinking, problem solving → SDG4 Target 7
- 「スキル」が、単に機能的に作業を行う技術としてではなく、個人の価値観(value), 態度(attitude), 知識(knowledge)と不可分のものとして論じられるようになる

  →職業技術教育を経た労働者が、実際の仕事の状況で、適切な作業をするためには、機能的技術をあてはめ、問題解決をする態度、価値観と問題解決能力が必要

  →従来は教育の成果評価には含まれなかった非認知的スキルの評価方法に関する議論が高まる

議論が集中した教育課題と、それらが発信された時期



2015年の世界教育フォーラムが近づくにつれ、「スキル」、「評価と評価のための指標」、「教育の包摂性」に議論が集中する

様々なアクターを巻き込んだ議論が、SDG4に盛り込まれた「スキル」の内容とそれを評価する方法に収れんしていくことが分かる。

SDG4への収れんの背景
EFA Review Process：質と包摂性

- 過去15年ぐらいで急に学校が増えている
  →教育の質が落ちている
    - 生徒がものすごく増えているのに、教師や教室、教材が足りない
    - 資金不足
- →学校に来ても学ぶべきことを学んでいない
- 教育の機会や結果に格差がある（親の教育や経済レベル、民族、男女、都市ー農村格差、障がい者など)
- 学齢期の青少年だけでなく、学ぶこと、技能を磨くことは、生涯続く営み

- ＜SDGの中での新しい課題＞
- 「学校に行く」ことは目的ではなく手段。大事なのは、何を学ぶか、学んだことが社会や本人の向上に役立つかどうか
  - 雇用可能技術の習得
  - 識字、計算能力の習得
  - 価値観や態度の形成
- 学校以外の場（職場や社会）での学習や、多様な年代、社会グループの学習の重要性の再認識

SDG4への収れんの背景(2)
Learning outcomeとSkillsをAssessする手段

- 学習の場やプロセスではなく、実際の状況で問題解決できる知識と技術

SDGにおける Outcome-based educationと Assessmentの議論に潜む本質的な課題

「カリキュラムの内容を咀嚼したか」ではなく、実際に使える知識、技能が身に着いたかどうかを測る必要

既存の統一テストなどとは違うAssessmentの手法の開発が求められている

PISA for Development (Since March 2015)
Proposal of the Learning Metrics Task Force (2014)
Global Partnership for Education

Reading skills of early grade studentsに集中している

- Learning assessmentの多くの分野が手つかずのまま、SDG4の指標化の作業が進められている
- Vocational skillsに関するOutcome-based AssessmentはSDG4達成に不可欠

結論：本セッションとのつながり

- グローバルな言説は、スキルを認知的、非認知的、および機能的な処理能力の複合ととらえる方向に向かっている
- Outcome-basedあるいはCompetency-based educationといわれる、近年の、現実の問題解決能力の有無を評価対象とする教育観は、職業技術教育にも敷衍されている。
- 本分析は、グローバルな言説が、独自のダイナミズムを持って、アクター間の相互影響の中で形成されていることを示したが、実際の各国の教育現場でそれがどのように実施されるのか、現実的な課題にどのように対処するのかは、ほとんど議論されていない。

→ 途上国で、若者のスキル形成のための教育が、労働市場や実際の仕事の場で求められるスキルを形成できているかを検証し、ギャップを埋めるための研究が必要